鹿角市文化財調査資料　57

黒土館跡

発掘調査報告書

1996－3

秋田県鹿角市教育委員会

序

秋田県の北東部に位置する鹿角市には、鹿角由来集に記載された「鹿角四十二館」とともに数多くの館跡が所在し、県内でも館跡の宝庫として知られています。

この度、鹿角市花輪字下夕町地内において急傾斜地崩壊防止事業が計画され、これに伴って黒土館跡の一部が消失することから、関係機関の協力を得、発掘調査を実施しました。

調査の結果、館跡を構成する帯郭・空堀等の遺構と共に、陶磁器、古銭等の遺物が出土しました。

本書は、これらの調査の成果をまとめたもので、文化財保護に対する理解と、歴史解明の糸口となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にあたりご指導、ご協力くださいました関係機関・各位に心から厚くお礼申し上げます。

平成８年３月

鹿角市教育委員会
教育長　浅　利　　忠

例　言

1　本報告書は、秋田県鹿角市花輪字下夕町、字陳場に所在する黒土（くろと）館跡の発掘調査報告書である。

2　本報告書の執筆は、調査員である藤井安正、花海義人が分担した。なお、第Ⅰ章２「黒土館跡の歴史的背景」については、『鹿角の館（５）』より転載した。

3　資料の鑑定については、下記の方々に依頼し、また協力を得た。

陶磁器鑑定　　青森県浪岡町史編纂室　　主査　工藤清泰

石器類石質鑑定　　秋田県十和田高等学校　　教諭　鎌田健一

4　土層、土器などの色調の記載には『新版標準土色帳』（日本色彩研究所）を使用した。

5　本報告書に掲載した地形図は、建設省国土地理院発行の『花輪』（Ｓ：1/25,000)を使用した。

6　遺物の整理・報告書作成の一連の作業については、調査員の指導のもと調査補助員・整理作業員が行なった。

7　本報告書に収載した図版のスケールについては各々に示した。なお、写真図版については任意の縮尺とした。

8　本報告書の文中において、用語の主たるものについては統一するように努めたが、繰り返し使用されるものについては簡略しているものもある。

9　図版等で下記のような記号、スクリーン・トーンを使用した。

ＳＤ……溝状遺構・空堀・縦堀

遺構確認面下の土層　　空堀・沢

10　発掘調査、報告書作成にあたっては、下記の方々よりご指導、ご助言を得た。記して感謝の意を表します。（敬称略、順不同）

冨樫　泰時、桜田　隆、高橋　学（秋田県埋蔵文化財センター）

板橋　範芳（大館市教育委員会）、関　直（盛岡市立高等学校）

本文目次

序
例言
本文目次
図版・表・写真図版目次
第Ⅰ章　遺跡の環境
　1．遺跡の位置と周辺の館跡 …… 1
　2．黒土館跡の歴史的背景 …… 2
　3．黒土館跡の現況 …… 6
　4．遺跡周辺の地形と遺跡の層序 …… 6
第Ⅱ章　調査の概要
　1．調査に至るまでの経過 …… 8
　2．調査要項 …… 8
　3．調査の方法 …… 9
　4．調査の経過 …… 9
第Ⅲ章　検出遺構と出土遺物
　1．帯郭と検出遺構 ……10
　2．遺構外出土遺物
　　(1) 縄文土器 ……15
　　(2) 陶磁器 ……16
　　(3) 鉄製品・古銭 ……16
　　(4) 石器・石製品 ……16
第Ⅳ章　調査のまとめ ……19
　報告書抄録

図版・表・写真図版目次

図版目次

第１図　黒土館跡の位置 …… 1
第２図　黒土館跡現況図 …… 3
第３図　黒土館跡周辺切絵図 …… 5
第４図　基本層序・遺構土層図 …… 7
第５図　各期遺構配置図(1) ……11
第６図　各期遺構配置図(2) ……12
第７図　縦掘実測図 ……13
第８図　第Ⅱ帯郭溝状遺構実測図 ……13
第９図　遺構外出土遺物拓影図(1) ……14
第10図　遺構外出土遺物拓影図(2) ……15
第11図　遺構内・外出土遺物実測図(1) ……17
第12図　遺構内・外出土遺物実測図(2) ……18

写真図版目次

ＰＬ１　黒土館跡航空写真 ……20
ＰＬ２　各帯郭の状況 ……23
ＰＬ３　出土遺物(1) ……24
ＰＬ４　出土遺物(2) ……25
ＰＬ５　出土遺物(3) ……26

第Ⅰ章　遺跡の環境

1．遺跡の位置と周辺の館跡

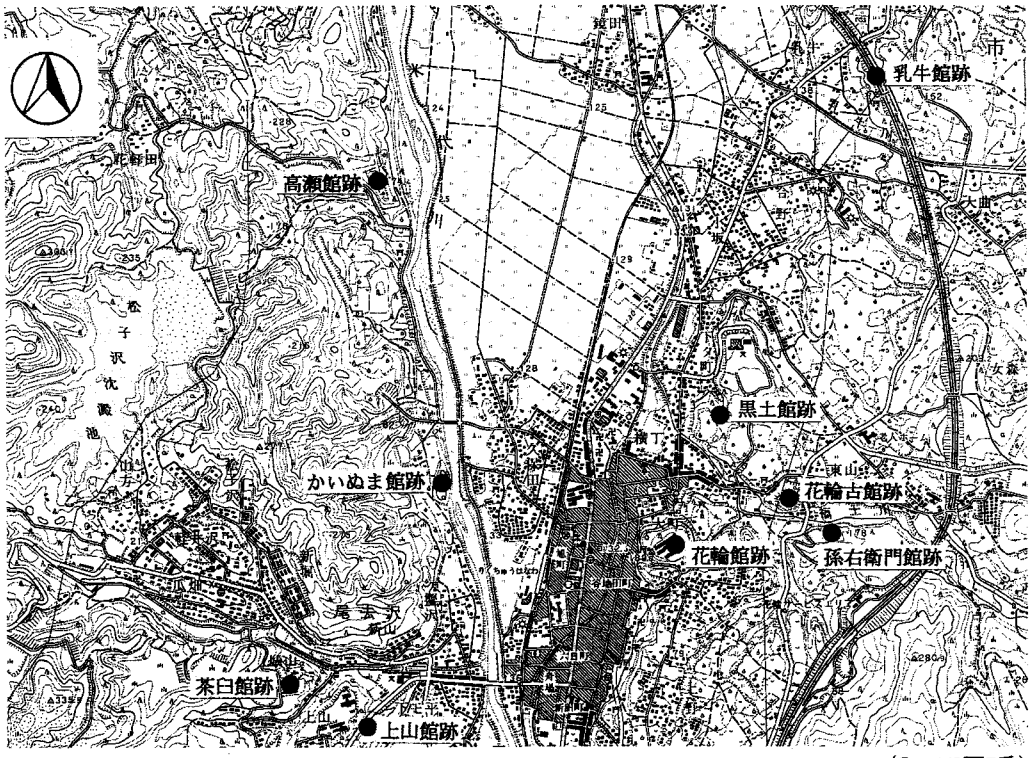
鹿角市は、秋田県の北東部に位置する。奥羽山脈と高森山地の懐に抱かれた鹿角盆地は、南北に細長い盆地で、盆地内を米代川が北へ向かい貫流する。

米代川やその支流によって形成された標高150m～180mの河岸段丘・舌状台地が山脈・山地の裾野に発達し、その先端部には数多くの館跡が分布している。

黒土館跡もその一つで、西流する福士川の右岸台地、花輪市街地の北東端部に位置し、ＪＲ花輪線鹿角花輪駅からの距離は１㎞である。

本館跡の東500mには花輪古館跡、南東750mには孫右衛門館跡、南650mには近世の花輪館跡（花輪通要害屋敷）が位置しているほか、西側には米代川を挟み、かいぬま館跡、高瀬館跡等が位置している。なお、縄文時代中期の大集落である天戸森遺跡は、本館跡を区切る北端の空堀を挟み対峙している。

（花海　義人）



第１図　黒土館跡の位置　（S：1/2万5千）

2．黒土館跡の歴史的背景

黒土館跡の歴史的背景については、鹿角市文化財調査資料30『館跡航空写真測量調査報告書（5）鹿角の館』掲載の「黒土館跡」の「黒土館跡の歴史的背景」を再録した。

黒土館（註1）は、福士川（東→西）右岸の字陳場所在の台地（以後陳場台とする）にある。黒土館の東300mの同じ台地上には、花輪古館がある。福士川の対岸、南400mには、近世の花輪館（花輪通要害屋敷）がある。西方1,300m北流する米代川左岸の台地上には、黒土館と深い繋がりのある高瀬館がある。黒土北東の台地上（鹿角市花輪第一中学校敷地）には、縄文時代の遺跡天戸森遺跡がある。

黒土館については、「鹿角由来集」（註5）には、次のように記されている。

一、黒土村、黒土丹後領名字秋本館有り

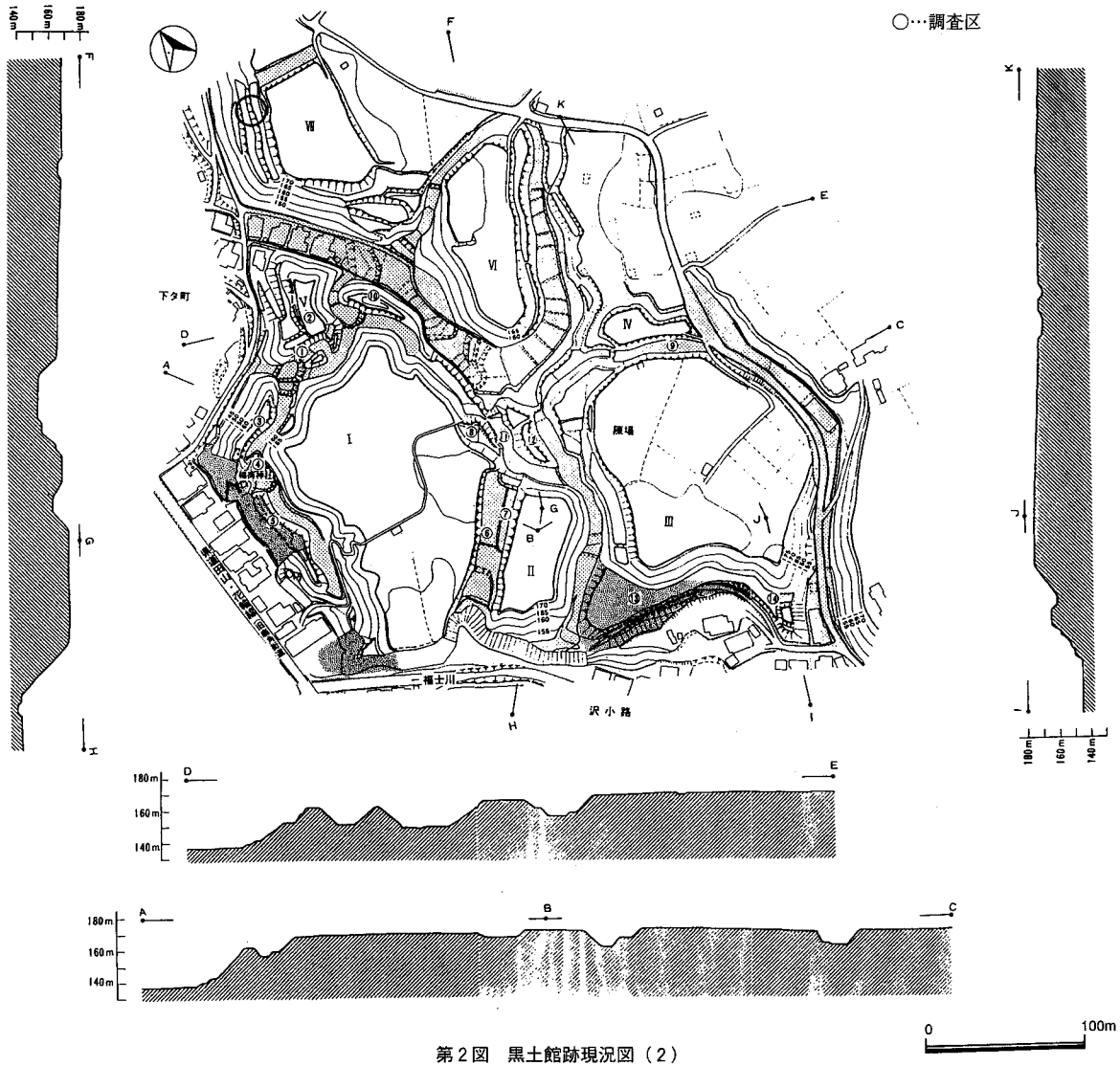
秋元氏は、中世鹿角に於いて威を振るった武士団で、鎌倉期に鹿角郡に所領を得た関東武士団の地頭代が、その出自と考えられている。秋元氏の出自ついては「秋田県史」（註６）では、『寛政呈譜』にある「上総国周准郡秋元荘を領した宇都宮頼綱の子泰業が秋元を稱したによる」を引用し、鹿角の秋元氏もこの流れを汲むものとしている。しかし、『寛政呈譜』の秋元氏の出自については、疑問のあるところとされている（註7）。また、鎌倉御家人に、平姓秋元氏がいたことを伝える資料がある。（註8）

「津軽郡中名字」に、

鹿角三百町ハ四人ノ國人也謂奈良・成田・阿部・秋元四人也、～（略）～秋元ハ高瀬、長内、小猿辺、三ケ所ニ分ル、公任卿ノ末孫也

とある。また、秋元氏の館跡と伝えられる長牛館からは、「平道叙」と刻まれた正安元年（1299）銘の板碑が、発見されている。これらのことは、従来の説が疑問視されている秋元氏の出自を知る手掛かりとなろう。

「鹿角由来集」（註11）等より、秋元氏の惣領は、高瀬館に居った高瀬氏と推察される。その所領は、高瀬館を中心とする西山地区、八幡平地区、鹿角北部の小坂地区等に、分布している。「鹿角由来集」等からは、秋元氏の所領の分布、一族の館主を知ることができる。しかし、秋元氏の動静についての史料は、ほとんど伝わっていない。安保・成田・奈良の各氏についても、鎌倉期～近世初期にかけての動静に関する史料などは、非常に少ない。それでも、戦国期以降の史料にその名を散見する。が、秋元氏一族は、当時の記録にまったく見えない。秋元氏は、かなり早い時期に（註12）、周辺有力武士団による鹿角争奪戦の過程で、没落・離散したものと思われる。「鹿角由来集」には、それを示唆する記事が、みられる。



第２図　黒土館跡現況図（２）

一、長牛村（註13）本ハ秋本（ママ）弾正左衛門秋田牢人～（略）～

一、高屋村　　高屋筑前領名字秋本（ママ）館有秋田牢人～（略）～

秋本氏一族の鹿角離散を裏付けるように、北秋田地方や、津軽地方には、鹿角秋元の流れを汲むと伝えられる家がある。(註14)

黒土氏についても、詳しいことはわからない。おそらくは、同様の経路で、没落・離散したものと思われる。伝説の域をでないが、「鹿角由来集」等には、源平合戦に於ける屋島の合戦（文治元年、1185）に従軍した鹿角侍の中に、黒土丹後の先祖、黒土六郎恒港がいたと伝えている。

また、「鹿角由来集」には、この記事に続けて、次のようなことが記されている。

「～（略）～阿弥陀四躰僧四人下シ奥州江下リ京都花輪黒土高瀬大里壱躰宛寺建立阿弥陀立菩提弔申候丹今四ケ村之寺跡道場林など御座候花輪阿弥陀は今に恩徳寺本尊ニて有之高瀬阿弥陀は花輪徳正寺ニ有黒土阿弥陀ハ黒土牢人以後石鳥谷江参候石鳥谷檜山合戦之時室申候大里阿弥陀ハ焼失申」

黒土村に於ける寺院跡等については、何も伝わっていない。文中に檜山合戦とあるのは、南部氏・安東氏による永禄９～12年（1566－69）までの、鹿角争奪戦（註16）のことと思われる。とすれば、黒土氏の鹿角離散の時期は、永禄合戦以前となろうか。

黒土館は、天正末年までその機能を果たしていたらしく、現在遺構からも、戦国期以降も存立していたと推察される。また、陳場台の広い範囲にわたって、黒土館を中心として構築されたと思われる防御遺構が残っている。しかし、黒土氏牢人以後の黒土館についての史料は、皆無である。黒土氏以後の館主は、誰であったのか。花輪館の築城年代、花輪古館の存立期間、臥牛本館の位置等の解明が、黒土氏以後の黒土館を知る大きな手掛かりとなろう。

天正19年（1591）に、黒土館は破却された。　　（安村　二郎）

註１．現在の花輪地区には、黒土という集落も、黒土の地名も、伝わっていない。江戸時代に作成された「元文四年（1739）花輪通御代官所御絵図」・「北奥道中記」（いずれも盛岡中央公民館所蔵）には、本報告に於ける館跡の位置に「黒土館」が描かれている。館跡の西側帯郭に、黒土稲荷神社が鎮座している。以上から、本報告の館跡が鹿角四十二館の一つ、黒土館であろう。しかし黒土村の所在については、不明である。黒土館、陣場台の西裾に広がる下夕町の地名は、館の下夕に発達した集落（館の下夕の町）に由来すると伝えられている。江戸時代には、下夕町と組丁の境に木戸が設けられていた。

註２．『鹿角の館－館跡航空写真測量調査報告書(3)－』（鹿角市文化財調査史料25）・鹿角市教育委員会、1984年、P70－92。

註３．『御休堂遺跡発掘調査報告書』（鹿角市文化財調査史料19）鹿角市教育委員会、1981年。

註４．『天戸森遺跡』（鹿角市文化財調査史料26）鹿角市教育委員会、1984年。

註５．「京都四拾二江侍四拾弐人住居之事」の条。郷土史学習会編『鹿角由来集』鹿角市立花輪図書館、1977年、P80。

註６．『秋田県史』第一巻、古代・中世編、秋田県、1962年。

註７．太田亮『姓氏家系大辞典』第１巻、1934年、（秋元氏）P52－53。

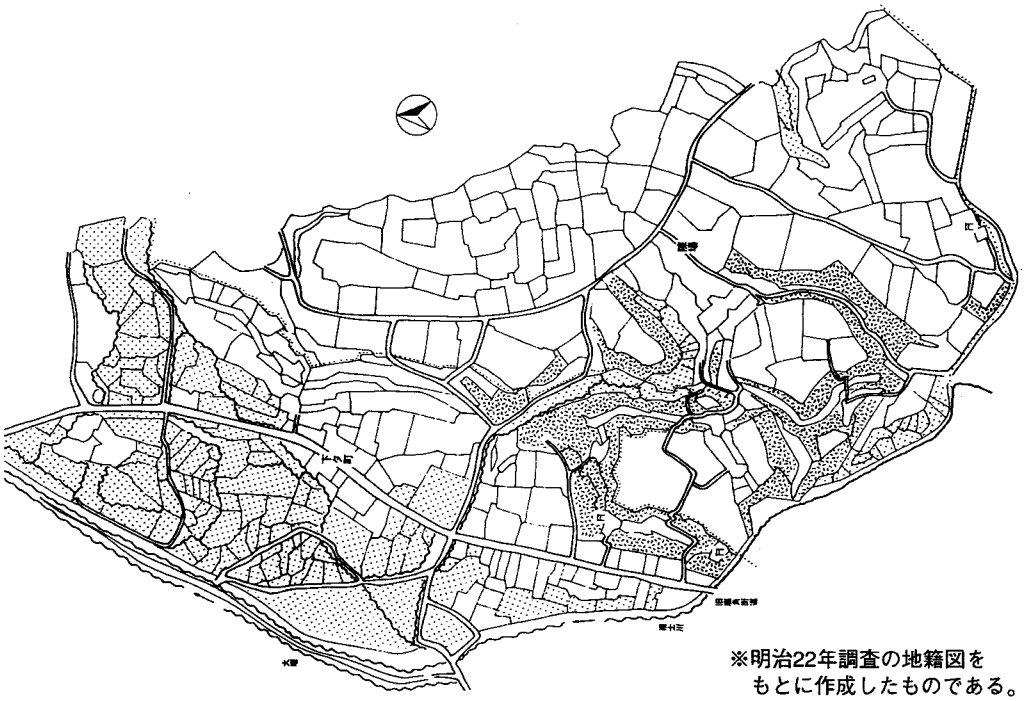
註８．「（弘安4年、1281）和与状」（「石清水文書之一」、198号、『大日本古文書』）。

註９．天文5年（1536）または天文15年（1546）に成立。『青森県史』（復刻）第１巻、歴史図書社、（1926年）1971年、P36。

註10.『鹿角由来集』、P7。

註11.「京都四拾ニ江ニ侍四拾弐人住居之事」の条。前揚書、P7－11。

註12. 時期については、不祥である。秋元氏の所領であった高梨村についての「鹿角由来集」の記事（前揚書P10）では、高瀬氏は、文明年中（1469－87）～明応年中（1492－1500）に



※明治22年調査の地籍図を
もとに作成したものである。
『鹿角の館(5)』より転載

第３図　黒土館跡周辺切絵図

は、まだ鹿角に居ったとある。

註13.『鹿角由来集』、P21、「秋田下国侍従近季鹿角被責附り長牛縫殿助覚書」にも、「長牛先方秋元弾正左衛門知行二而此仁秋田江牢人仕候事」とある。

註14.「鹿角市史」第1巻、鹿角市、1982年、P535－38。

註15.「義経公奥州御下奥勢御引卒出陣之時鹿角侍御供仕八嶋ニテ討死事」、(前揚書P15－16)、花輪赤石山恩徳寺にある「恩徳寺弥陀三尊縁起」によれば、従軍した鹿角侍は、大里行包、花輪次郎行房、高瀬七郎恒畿、黒土六郎恒巷の四人とある。

註16. この合戦で、石鳥谷館は落城したといわれる。

註17. 伊藤祐清私記―内山助右衛門奥北の館破却之事―」(「南部叢書」第3冊、P113－460、1970年、P183)。

3．黒土館跡の現況（第3図・4図）

黒土館跡の現況については、鹿角市文化財調査史料30「館跡航空写真測量調査報告書(5)・鹿角の館」掲載の「黒土館跡」の「立地と現況」を参考されたい。

4．遺跡の層序（第5図）

調査区を覆う層序は、地山（シラス面）まで5層に区分される。

Ⅰ層　黒褐色土（10YR2/2）耕作土盛土

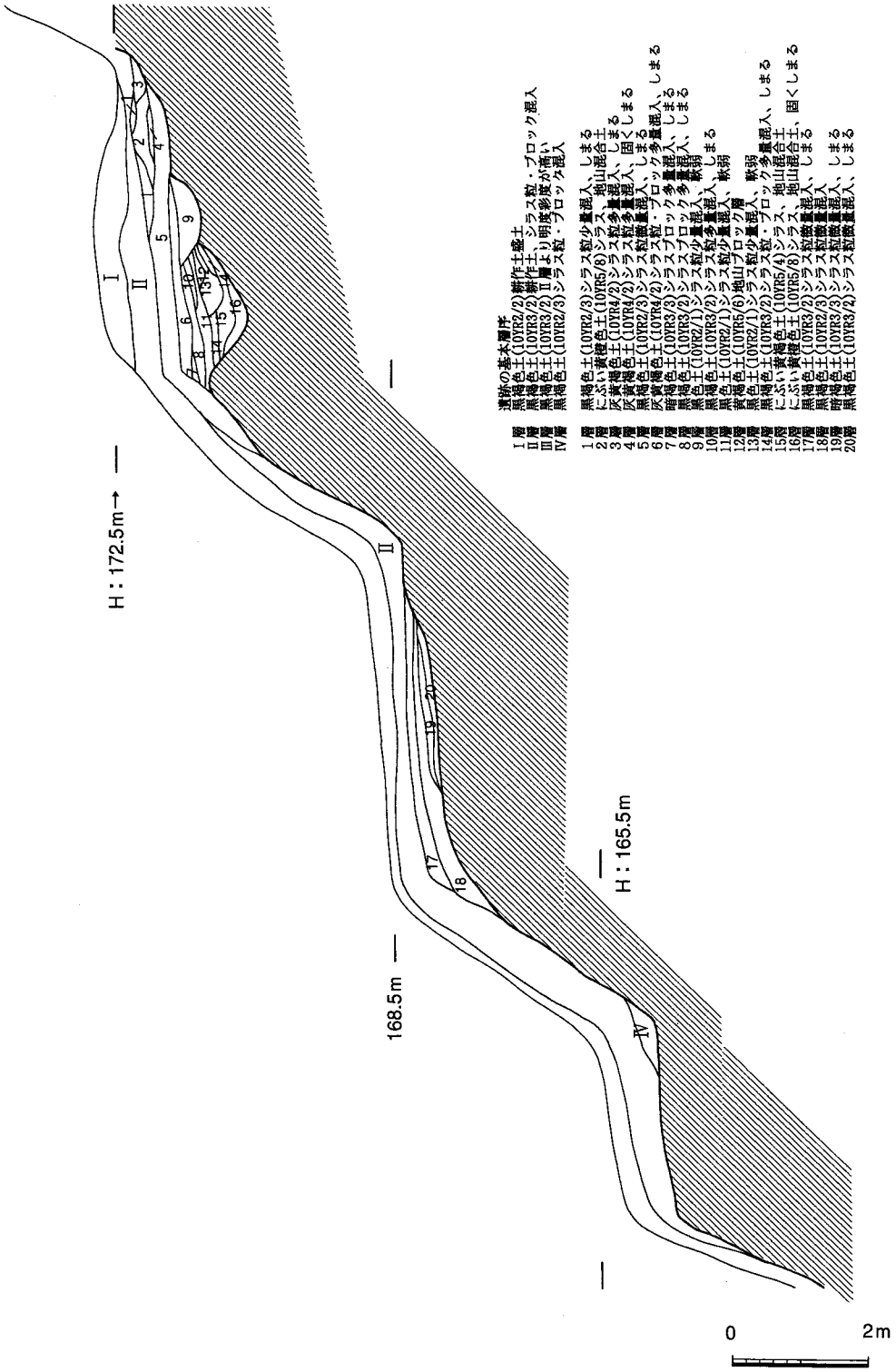
Ⅱ層　黒褐色土（10YR3/2）シラス粒・ブロックを含む。旧耕作土及び表土

Ⅲ層　黒褐色土（10YR3/2）色調は同じであるが。色彩が明るい。

Ⅳ層　黒褐色土（10YR2/3）シラス粒・ブロックを含む。

なお、調査区中央に設定したトレンチよって、沢状の地形を確認したと供に、層序観察では約2mの黒色土の中に間層として入り込んだ大湯浮石層の薄い堆積が認められた。

（藤井　安正）



第４図　基本層図・遺構土層図

第Ⅱ章　調査の概要

1．調査に至るまでの経過

秋田県鹿角土木事務所では、黒土館跡の北東側において急傾斜地崩壊防止事業を計画し、これに係る発掘調査を秋田県教育庁文化課に依頼した。しかし、県文化課では多量の事業量を抱えており対応することが出来ず、鹿角市教育委員会へ黒土館跡発掘調査の依頼があった。

これを受けて、３月上旬には鹿角土木事務所と市教育委員会との間で、同下旬には県文化課を交えて発掘調査について協議を行い、当教育委員会が調査・報告書作成を行うことで合意した。なお、発掘調査委託契約については９月１日付けで契約を締結した。調査期間については、事業計画を考慮し、平成７年９月７日から10月31日にかけて実施することとした。

（藤井　安正）

2．調査要項

1．遺　跡　名	黒土館跡	
2．調　査　地	秋田県鹿角市花輪字下夕町、字陳場ほか	
3．発掘調査面積	４５０㎡	
4．調査期間	調　査　準　備	平成７年９月７日～９月８日
	発　掘　調　査	平成７年９月11日～10月31日
	整理・報告書作成	平成８年１月25日～平成８年３月29日
5．事業主体者	秋田県鹿角土木事務所	
6．調査主体者	鹿角市教育委員会	
7．調査担当者	鹿角市教育委員会　生涯学習課	
	主任　藤井安正	
	主事　花海義人	
7．調査参加者	調査指導員	熊谷太郎（秋田県教育庁文化課　学芸主事）
	調　査　員	安村二郎（鹿角市史編さん委員）
	調査補助員	柳沢和仁、大森寿子
	発掘作業員	児玉秀春、三浦茂雄、土井口敬三、間藤儀三郎 安保謙太郎、佐藤一男、苗代沢ノブ、宮沢トミエ 柳沢勝江、柳沢ヤス、柳沢恵美子、佐藤良子 木村千鶴江、高村サツ、柳館愛子、児玉サキ 松宮カチ
整理作業員	田中栄子、福島美紀子、石川千春、黒沢文子	

9．生涯学習課　　課　　長　田中正美

主席課長補佐　斎藤瑩子

課 長 補 佐　奈良勝哉

主　　査　秋元信夫

主　　任　藤井安正

主　　事　花海義人

10. 調査協力機関、協力者

秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター、秋田県出納局管財課

花輪第一中学校、佐藤　樹、古川孝政

3．調査の方法

調査区は、急傾斜地に位置するためグリットの設定は困難であった。このことから、便宜的に帯郭を大きなグリットと見做した。

遺構確認面及び帯郭構築面までの表土・堆積土の除去は手掘りとし、遺構についてはできるかぎり上面で確認するように努めた。遺構の番号は確認順に付した。遺物の取り上げは、帯郭(上段よりⅠ帯郭～Ⅲ帯郭と呼ぶ)、各層ごとに取り上げた。また、遺構の実測については平板測量を使用し、縮尺1/100で図化した。

写真撮影には、２台のカメラを使用し、作業の進行状況毎にモノクロ、リバーサルフィルムに収めた。

4．調査の経過

発掘調査は、平成７年９月11日から開始し、10月31日に終了した。調査経過の概要は次のとおりである。

９月11日、作業員への事務連絡、作業説明後、調査区内の枝木の後片付けを行う。同日から22日までは樹齢30年程の杉等の抜根とその処理作業に全力を費する。

９月25日より、Ⅲ帯郭にトレンチを設定しその掘り下げと帯郭の表土除去を行う。

９月27日からは、Ⅱ帯郭の表土除去に取り掛かり、10月５日には同帯郭において性格不明の溝状遺構を確認する。10月11日よりⅠ帯郭の表土除去に取り掛かる。24日には最終確認面において空堀を確認し、その状況の写真撮影後、精査を開始する。空堀内からは古銭と共に多量の礫が出土した。10月31日、Ⅰ帯郭の全体写真撮影、平面図作成と共に発掘器材の洗浄、運搬を行い、現地での調査を終了した。

(花海　義人)

第Ⅲ章　検出遺構と出土遺物

1．帯郭と検出遺構（第６図～８図）

遺構の重複や遺跡の層序ごとに、４期の時期が認められた。各時期ごとに帯郭の状況及び当該時期の検出遺構・出土遺物について古い時期のものから記述する。なお、帯郭については上段のものからⅠ～Ⅲ帯郭と呼称する。

（第１期）館跡の初期構築時期のものと判断される。西側斜面の上段に小さな平場とその下段に幅５～２m程の３つの帯郭を作り出している。Ⅰ帯郭はシラス層を堀り、Ⅱ～Ⅲ帯郭はシラスを若干堀込むが、盛土によって平場を構築している。いずれの帯郭もほぼ平坦で、硬く踏みしめられている。この時期の遺構はⅠ帯郭に認められた空堀で、若干のうねりがあるものの帯郭と平行に構築されている。確認できた長さは34m、幅1.9～2.4m、深さ0.5～0.7mを測り、空堀内には大小の礫が多量に認められた。遺構内より古銭１点（元祐通宝）、石製品２点（有孔石製品１点、碗状石製品１点）、鉄製品３点（楔１点、釘２点）、石器２点（掻器１点、凹石１点）が出土した。

（第２期）第１期に構築されたⅠ帯郭空堀を埋め立て、再度１期空堀と重複するように空堀を作り出している。その他帯郭は第１期のものが引き続き使用されている。確認できた空堀の規模は、長さ34m、幅1.5～1.9m、深さ0.3～0.4mを測る。

本時期に伴う遺物は出土しなった。

（第３期）第２期空堀を埋め戻すと共に、Ⅰ・Ⅱ帯郭に若干の盛土を施し平坦にしている。３帯郭は２期の状態のまま使用される。

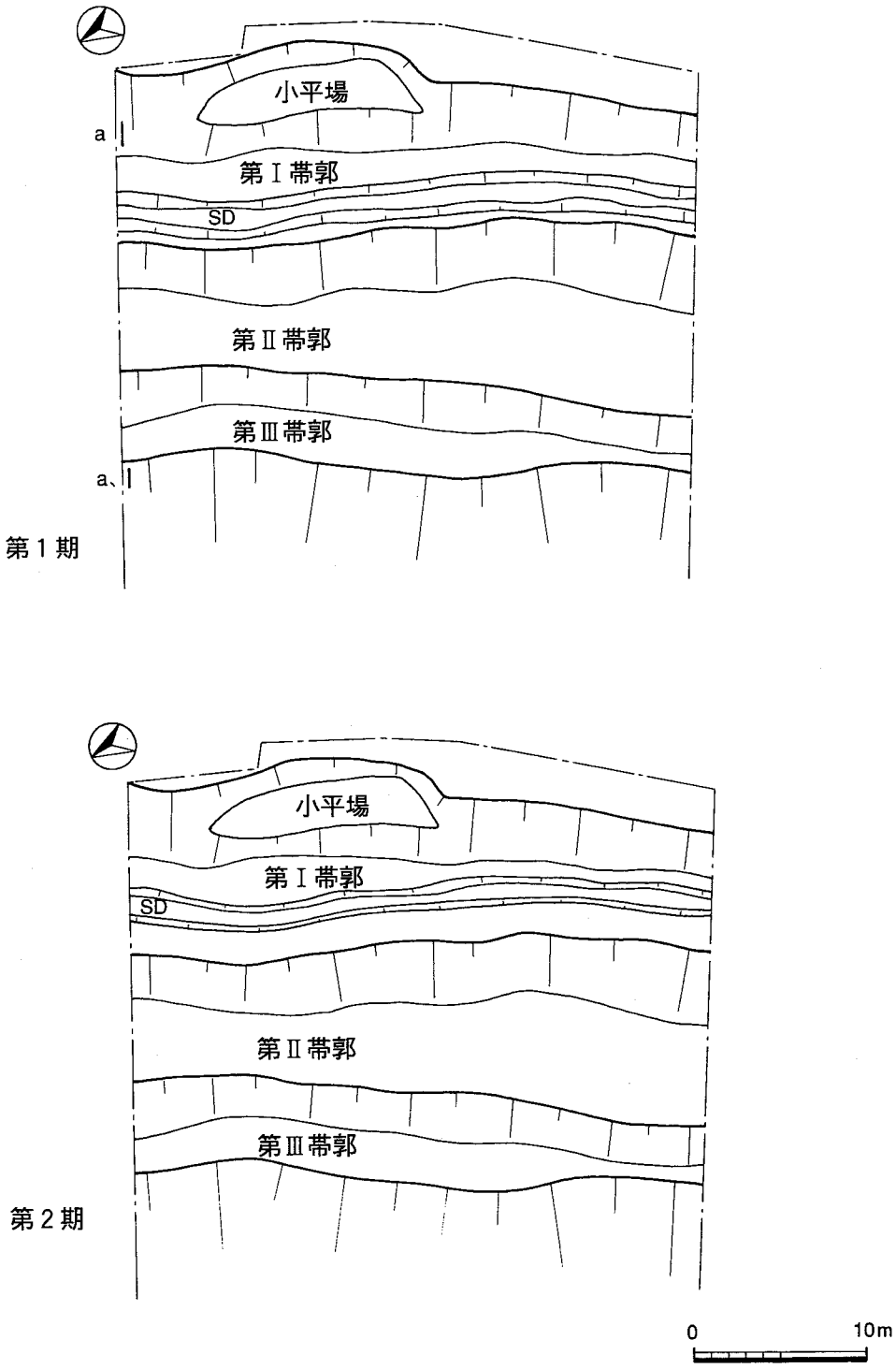
Ⅰ・Ⅱ帯郭の縁際に長軸方向が東西を向く溝状遺構を構築し、Ⅰ・Ⅱ帯郭より各７条の溝状遺構を確認した。その規模は、長軸1.5～2.2m、幅0.2～0.25m、深さ0.1～0.15mを測る。

本時期に伴う、遺物は出土しなかった。

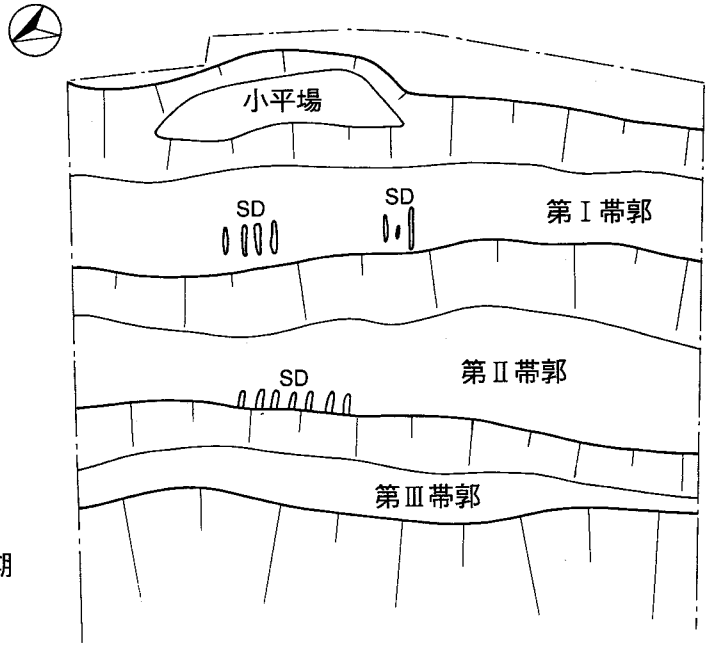
（第４期）最上段に12×2.5m の小平場を作り出している。第３期の溝状遺構は埋め戻されると共に、Ⅰ帯郭には盛土を施し、平坦な面を作り出している。

小平場の両端及びⅠ帯郭に平面が不整形、断面がU・V字状を呈する堀込みが確認された。

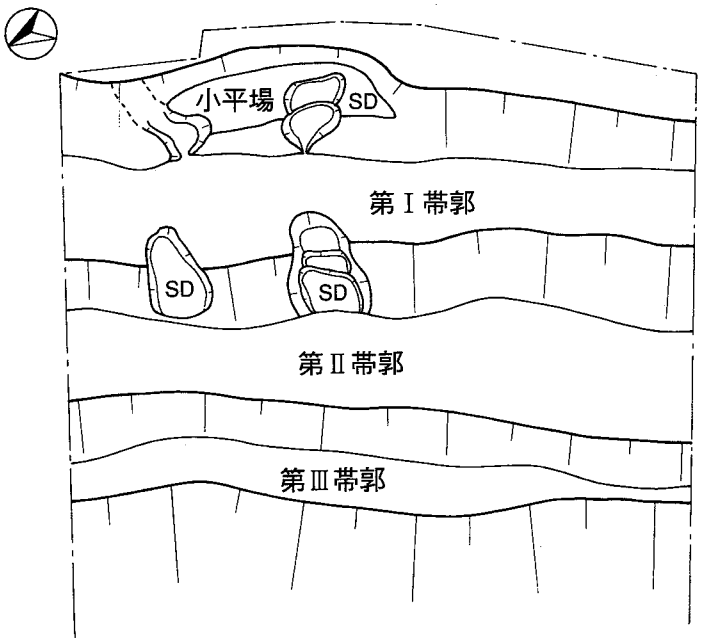
本時期に伴う、遺物は出土しなかった。



第５図　各期遺構配置図



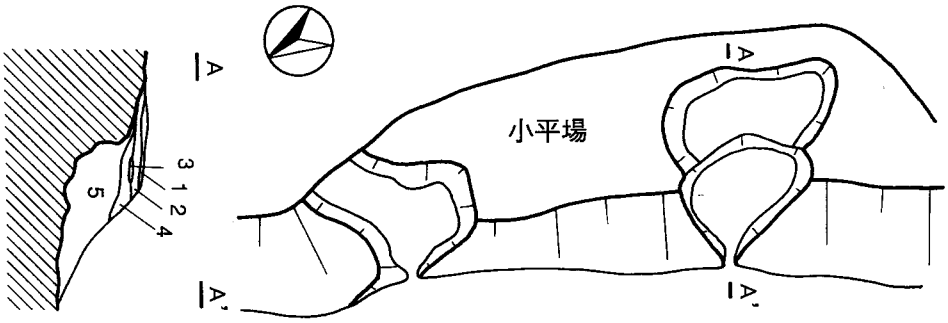
第３期



第４期

0　10m

第６図　各期遺構配置図

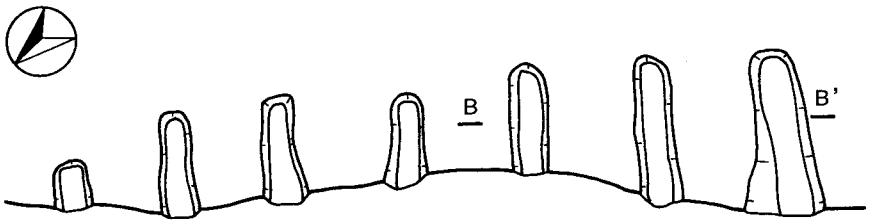


第Ⅰ帯郭

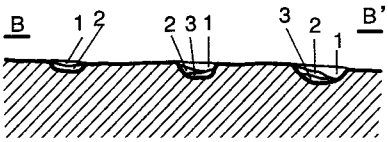
1層 縦堀土色説明
2層 黒色土(10YR2/1)軟弱
3層 にぶい黄褐色土(10YR5/4)
4層 黒色土(10YR2/1)軟弱
5層 黒褐色土(10YR2/2)軟弱
黒色土(10YR2/1)軟弱

0 4 m

第７図　縦堀実測図

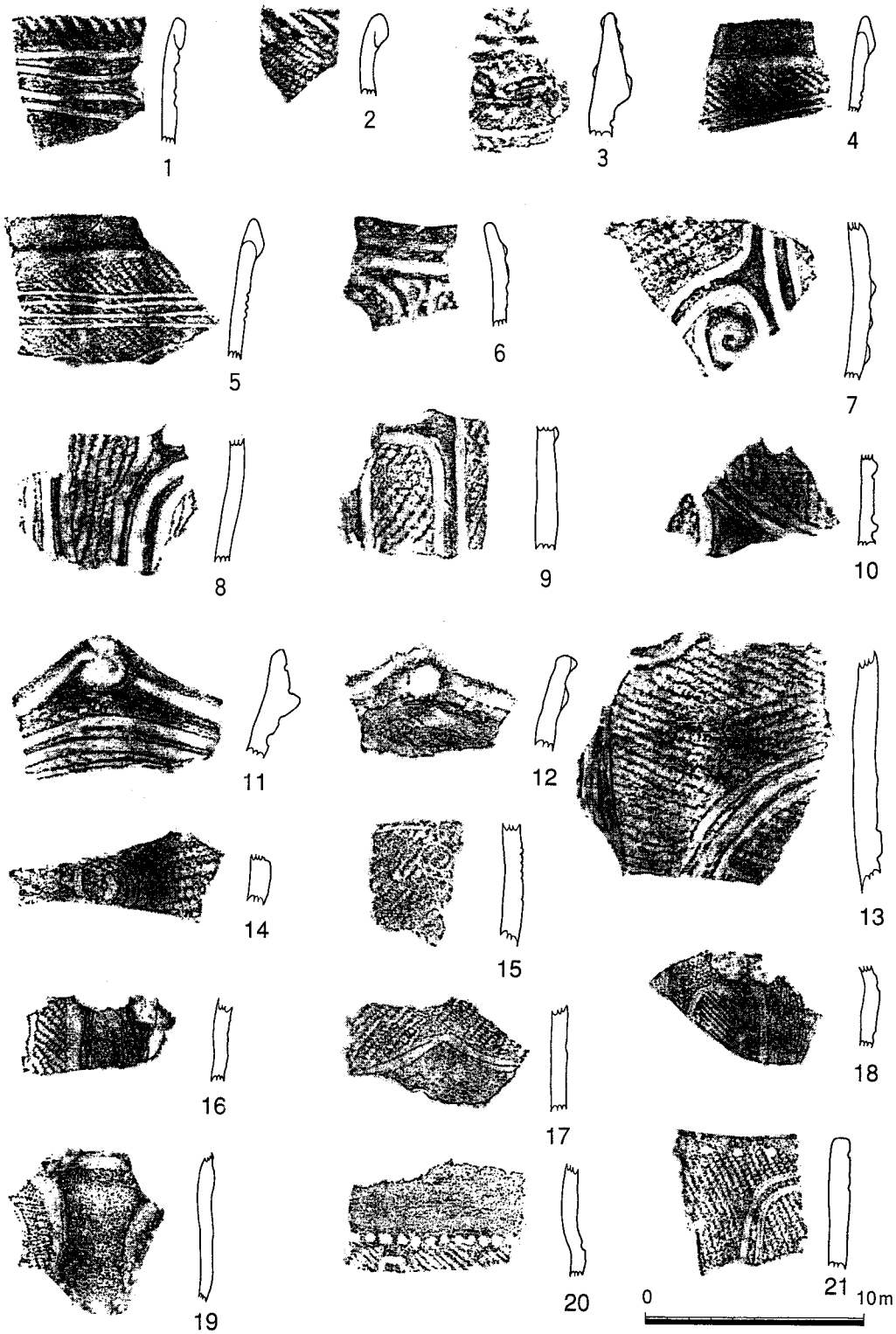


溝状遺構土色説明
1層　暗褐色土(10YR3/3)
2層　黒褐色土(10YR2/2)
3層　にぶい黄橙色土(10YR5/8)シルト質
4層　にぶい黄褐色土(10YR5/4)シルト質

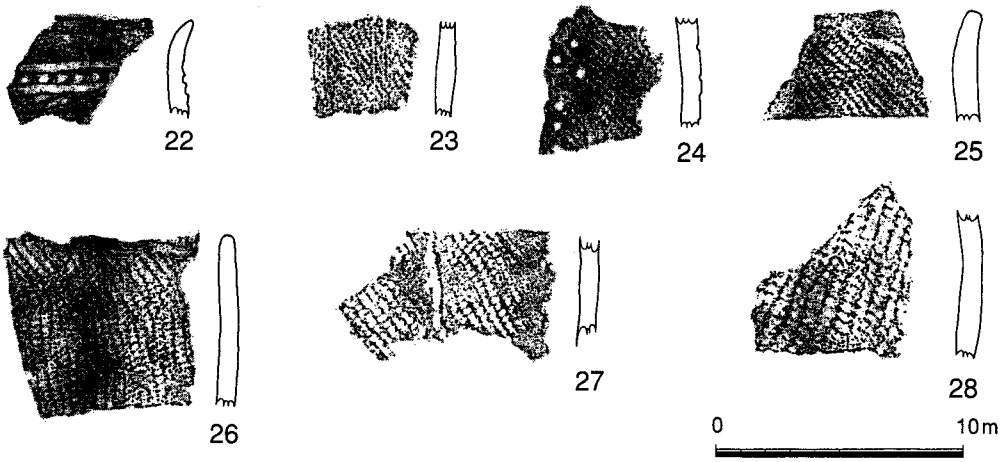


0 2 m

第８図　第Ⅱ帯郭溝状遺構実測図



第９図　遺構外出土土器拓影図（１）



第10図　遺構外出土土器拓影図（２）

２．遺構内・外出土遺物

調査区遺構内・外からは縄文土器破片、陶磁器、石器、石製品、鉄製品、古銭が出土した。その概要は以下のとおりである。

（１）縄文土器（第９図～11図）

調査区遺構外より縄文中期中葉～末葉の土器破片がコンテナ１箱が出土した。土器は本遺跡の占地する台地上に大きく広がる天戸森遺跡から土砂と共に流れ落ちてきたものと判断された。

土器の分類については、文様・施文技法により細分した。

１類　深鉢形土器が主体となる。口唇部に斜位刻み目を有し、口縁部から胴部にかけて沈線による弧状文が施文される土器で円筒上層ｅ式に比定できる。３のように山形突起を持つものには粘土紐の貼付けがみられる。焼成は良好、色調は暗赤褐色を呈する。

２類　深鉢形土器が主体となる。隆沈文による渦巻文を主体文様とする土器で、大木８ｂ式に比定される。焼成は良好、色調は暗赤褐色、褐色を呈する。

３類　深鉢形土器が主体となる。口唇部の凹線文、胴部の沈線による曲線文を特徴とする。大木８ｂ式に併行する。11は口唇部に凹線文をもち榎林Ⅰ式土器の特徴をも持つ。焼成は良好で色調は赤褐色、橙色、黒褐色を呈する。

４類　広口壺が主体となる。広口壺の口縁部は幅広く、無文研磨される。胴部文様は「∩」状懸垂を特徴とするもので、刺突文が付加されるものもある。地文としてＲＬ縄文が多用・施文される。大木９式に併行し、中の平Ⅲ式に比定される。焼成は良、色調は橙色、にぶい褐色

を呈する。

5類　磨消縄文による文様を横位方向に展開するもので、「C」、「S」字文を主文様とする。LR・RL縄文が充填される。焼成は良好、色調は明赤褐色、にぶい赤褐色、黒褐色を呈する。

6類　文様帯を有しない土器を一括した。深鉢形土器が主体となる。地文として単節斜縄文（RL・LR縄文）が多用され、付加条縄文もみられる。焼成は良好、色調は明赤褐色、にぶい赤褐色を呈する。　（藤井　安正）

（2）陶磁器（第12図1～9）

調査区遺構内・外より、9点が出土した。

1は小平場より出土した美濃瀬戸系の鉄釉の壺で器外面および口縁部上端に釉が観察される18～19世紀のものである。2、3、6、7、9は備前系の陶磁器で碗、皿、壺、壷の破片で、7は五角または六角形の口縁を呈するものである。文様として線文、草花文が描かれている。3は17～18世紀、2は18世紀、これ以外は18～19世紀のものである。4、5、8は肥前系の小皿・の破片である。文様として草花文が描かれている。5、8は17～18世紀、4は18世紀のものである。

（3）鉄製品・古銭（第12図10～15）

調査区内より、鉄製品4点、古銭4点が出土した。10は楔、11、12は鉄釘、13は皿と想定される鉄製品である。いずれも1帯郭からの出土である。14は元祐通宝、15は寛永通宝で、14は1帯郭、15は2帯郭からの出土である。なお、この他に鉄銭2点が出土しているが、非常に脆く図化できなかった。

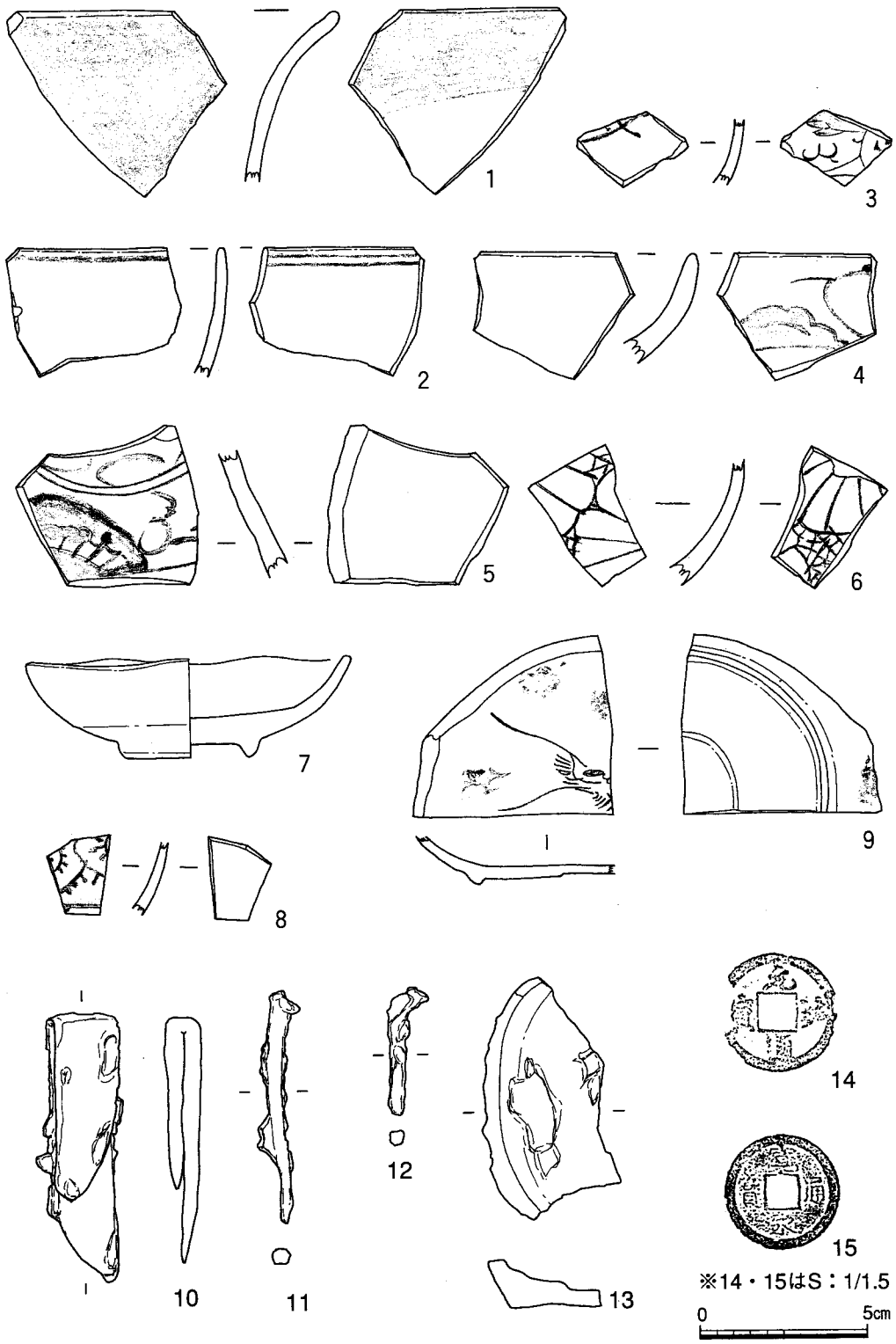
（4）)石器・石製品（第13図）

遺構外より21点の石器、3点の石製品が出土した。

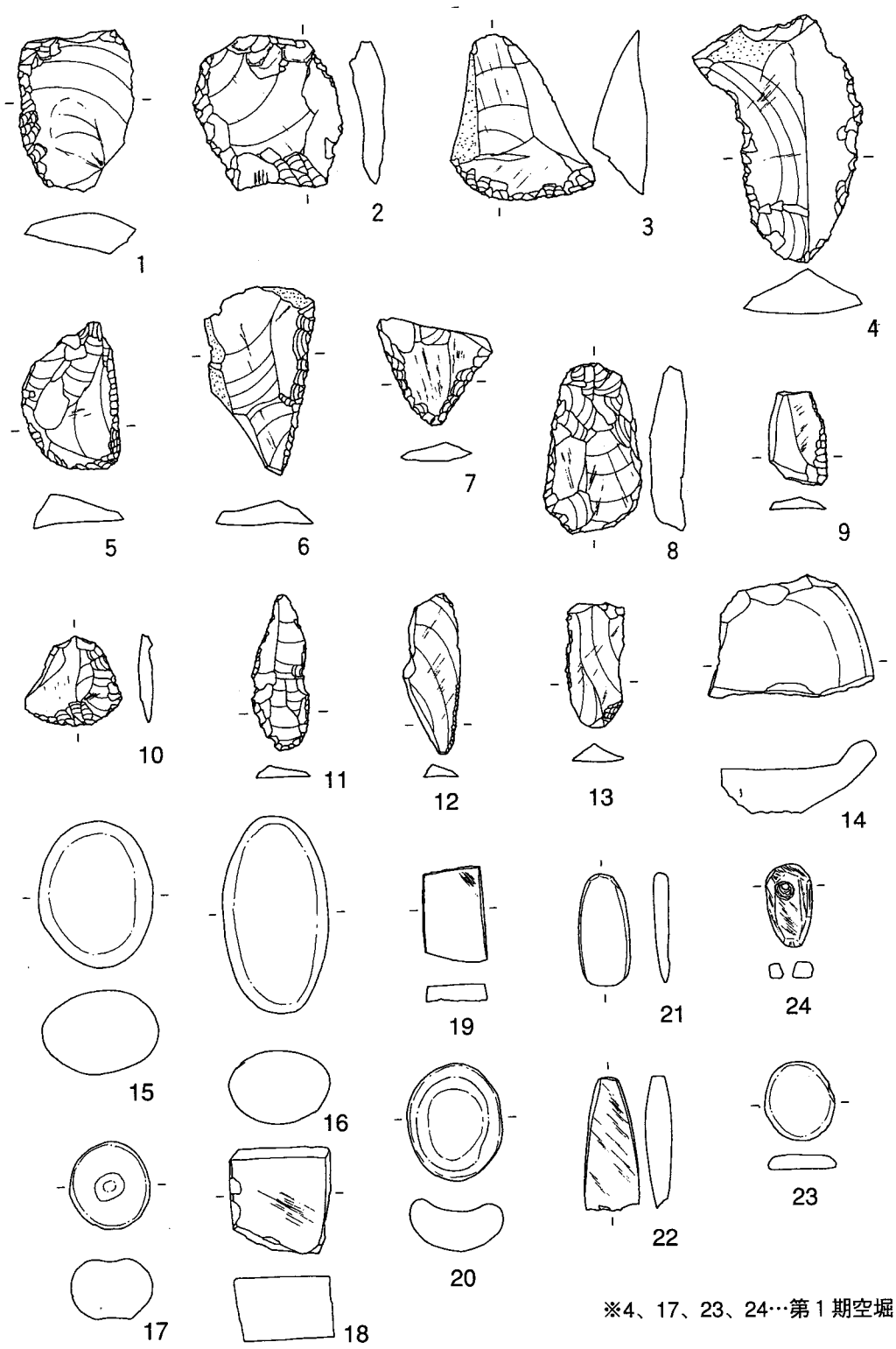
1～7、9～13は掻器で、片測縁～全周にかけて刃部を作り出している。石質は硬質頁岩である。8は石篦で表裏面に剥離調整が加えられている。石質は硬質頁岩である。14は石皿で脚のついた痕跡が下面にみられる。石質は凝灰岩である。15、16は磨石で両面に磨面を持つ。石質は砂質凝灰岩である。17は凹石で両面に各1個の凹を持つ。石質は凝灰岩である。18、19は砥石で長軸4面が使用される。石質は泥質凝灰岩である。21、22は定角の磨製石斧で、石質は緑色凝灰岩である。

20は碗状石製品で大きな凹を持つ。石質は泥質凝灰岩である。23は円盤状石製品で石質は泥質凝灰岩、24は有孔石製品で、両方向から孔が穿たれる。石質は砂質凝灰岩である。

（花海　義人）



第11図　遺構内・外出土遺物実測図（2）



※4、17、23、24…第１期空堀

第12図　遺構内・外出土遺物実測図（１）

第Ⅳ章　調査のまとめ

黒土館跡は、鹿角市花輪字陳場、字下夕町に所在する。館跡は、米代川の支流である福士川右岸に発達した舌状台地を空堀によって区切った７つの郭から構成されている。館跡からは鹿角盆地が一望され、南側には福士川を挟み花輪館跡、南東側には花輪古館跡、西側にはかいぬま館跡、高瀬館跡が位置している。なお、館跡南下には近世花輪館跡（花輪通要害屋敷）に伴った同心屋敷の置かれていた「組町（くみちょう）」がある。またその下手には黒土館跡に由来する「下夕町」が存在する。

黒土館跡・黒土氏については、不明な点が多い。『鹿角由来集』には「一、黒土村、黒土丹後領名字秋本館有り」とあるほか、同由来集や花輪赤石山恩徳寺の「恩徳寺弥陀三尊縁起」には、源平合戦における屋島の合戦（文治元年1185年）に従軍した鹿角侍のなかに、黒土丹後の先祖、黒土六郎恒巷がいたと伝えている。なお、同由来集には「黒土阿ミた黒土牢人以後石鳥屋江参候石鳥谷檜山合戦之時失申候」という記載が見える。文中の檜山合戦とは、南部・安東氏による永禄９～12年（1566～69年）までの、鹿角争奪戦のことと思われる。とすれば黒土氏の鹿角離散時期はこの合戦以後となる。このほか伊藤祐清私記「内山　右衛門奥北の館破却之事」によれば、天正19年（1591年）に、黒土館跡は破却されたという記載がある。

この度の調査は、急傾斜地崩壊防止事業に伴い本館跡の一部が消失することから、調査を実施し、記録保存することにあった。

調査によって館跡に関連する遺構・遺物として３つの帯郭、１つの小平場、空堀２条、縦堀４条、溝状遺構14条の遺構と、陶磁器９点、鉄製品４点、古銭４点の出土があったほか、縄文土器破片１箱（コンテナ換算）、石器24点、剥片51点の遺物が出土した。

帯郭に作られる空堀・縦堀の存在は、地羅野館跡からも検出されており、中世城館の特徴を持つものである。また、館跡．遺構の構築・存続時期を導きだす一資料である陶磁器については17世紀以降のものであり、遺物よりその時期を導きだすまでは至らなかった。

本館跡は、近世花輪館跡とは福士川を挟み対峙し、この間には同心組の居住地であった「組町」が位置する。「元文四年花輪通御代官所御絵図」や「北奥道中記」に黒土館が描かれていること、又、近世陶磁器の出土は天正19年の「館つぶし」以降において花輪館跡の影響下にあり、それに係わる施設が黒土館跡上面まで及んだことを示すものであろうか。

いずれにしても、黒土館跡の全容を解明するための史料・資料は断片的である。今後の資料増加を望むところである。

（藤井　安正）

参考文献

東京大学東洋文化研究所　『館址－東北地方における集落址の研究』
東京大学出版会　1958年

秋田県教育委員会　『秋田県の中世城館』　1981年
「天戸森遺跡」
『県道田山・花輪線関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ』1994年

青森県教育委員会　『中の平遺跡発掘調査報告書』　1975年

鹿角市　『鹿角市史　第Ⅰ巻』　1982年

鹿角市教育委員会　『天戸森遺跡発掘調査報告書』　1984年
『天戸森の土器－天戸森遺跡出土縄文土器図録』　1990年
『鹿角の館－館跡航空写真測量調査報告書１』　1982年
『鹿角の館－館跡航空写真測量調査報告書２』　1983年
『鹿角の館－館跡航空写真測量調査報告書３』　1984年
『鹿角の館－館跡航空写真測量調査報告書４』　1985年
『鹿角の館－館跡航空写真測量調査報告書５』　1986年
『地羅野館跡発掘調査報告書』　1993年
『小枝指館跡発掘調査報告書』　1992年
『花輪古館跡発掘調査報告書』　1994年

江坂輝彌　『石神遺跡』　ニュー・サイエンス社　1970年

冨樫泰時・安村二郎ほか　『日本城館大系　２』「秋田県」　新人物往来社　1980年

安村二郎ほか　「鹿角地方の館跡－航空写真測量調査に関して」
『よねしろ考古　第４号』　1988年

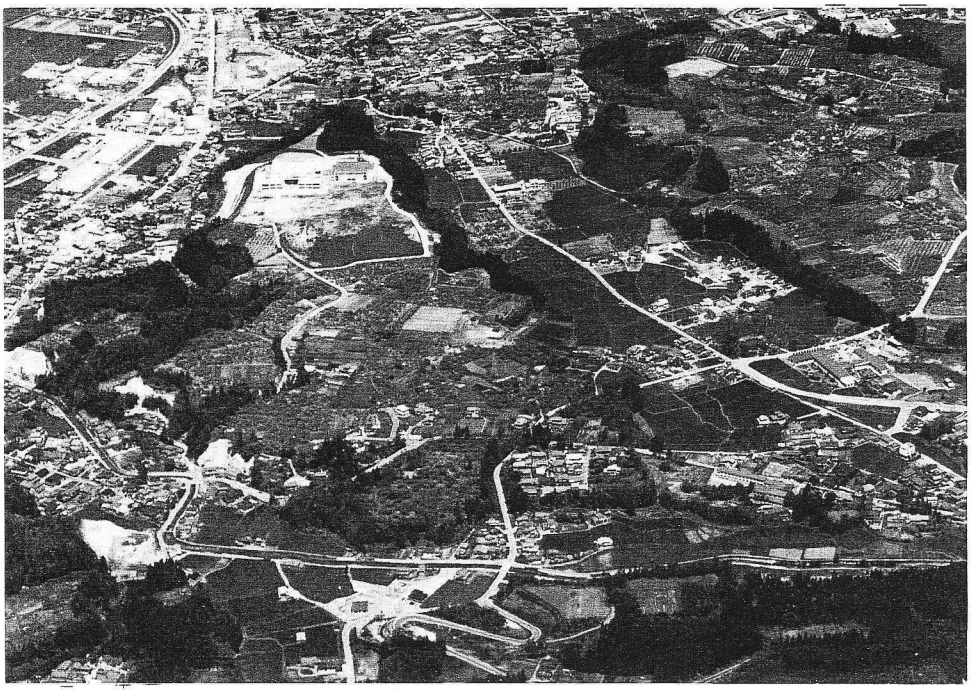
村越　潔　『円筒土器文化』雄山閣　1974年

報告書抄録

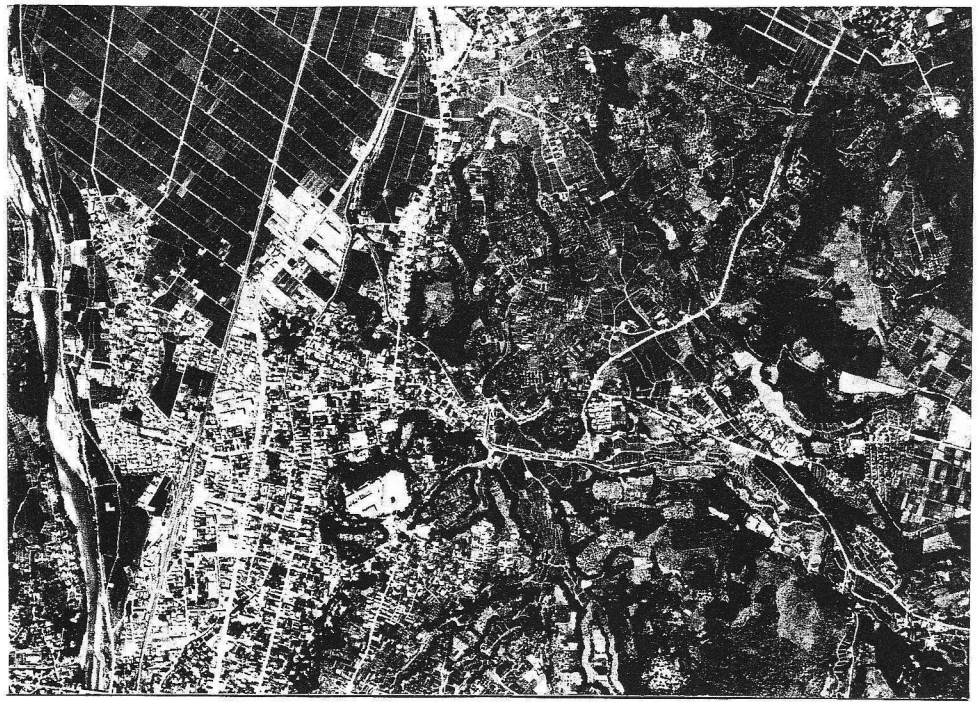
ふりがな	くろとたてあと はっくつちょうさほうこくしょ
書名	黒土館跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	鹿角市文化財調査資料
シリーズ番号	57
編著者名	鹿角市教育委員会　生涯学習課（藤井安正・花海義人）
編集機関	鹿角市教育委員会
所在地	〒018-52　秋田県鹿角市花輪字荒田４番地１　TEL 0186-30-1111
発行年月日	西暦1996年　３月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
くろと たてあと 黒土館跡	秋田県鹿角市 花輪字 下夕町 陳場	05209	306	40度 11分 73秒	140度 47分 93秒	19950911 ～ 19951031	450	急傾斜地崩壊防止事業に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
黒土館跡	館跡	中世	帯郭　３段 空堀　２条 溝状遺構　14条 縦堀　４条 小平場　１段	陶磁器 縄文土器（縄文中期） 石器（石匙・掻器など） 鉄製品（鉄屑を含む） 古銭	「鹿角四十二館」のひとつで７郭から構成される。館主は黒土三郎と伝えられる。 調査は館跡の北端部であったが、館跡の構造の一端を知ることが出来た。



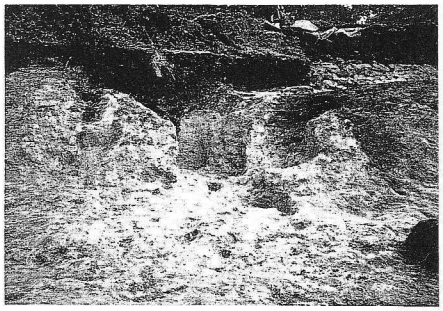
黒土館跡空航写真



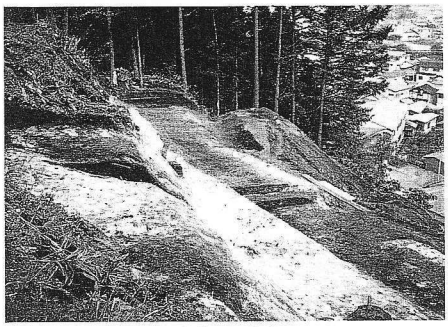
黒土跡空航写真（昭和48年）

PL 1　黒土館跡空航写真

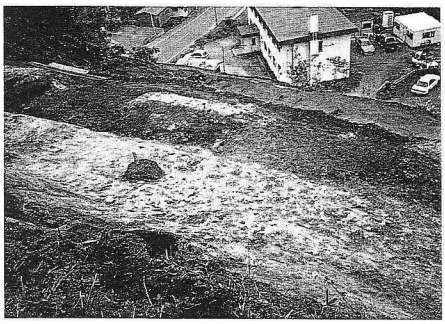
小平場全影（N→S）



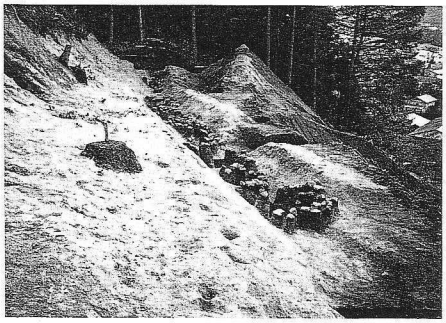
縦堀（小平場北部）



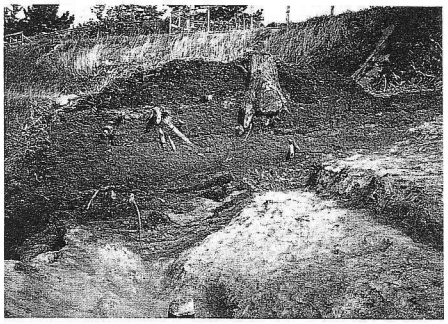
Ⅰ帯郭遺構確認



Ⅰ帯郭縦堀確認状況

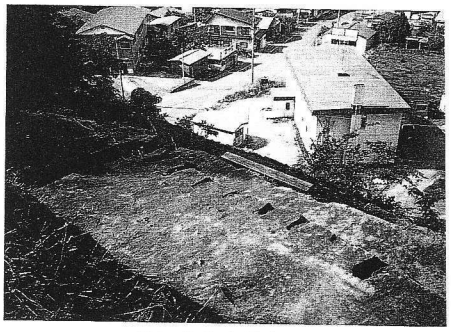


Ⅰ帯郭空堀完堀状況



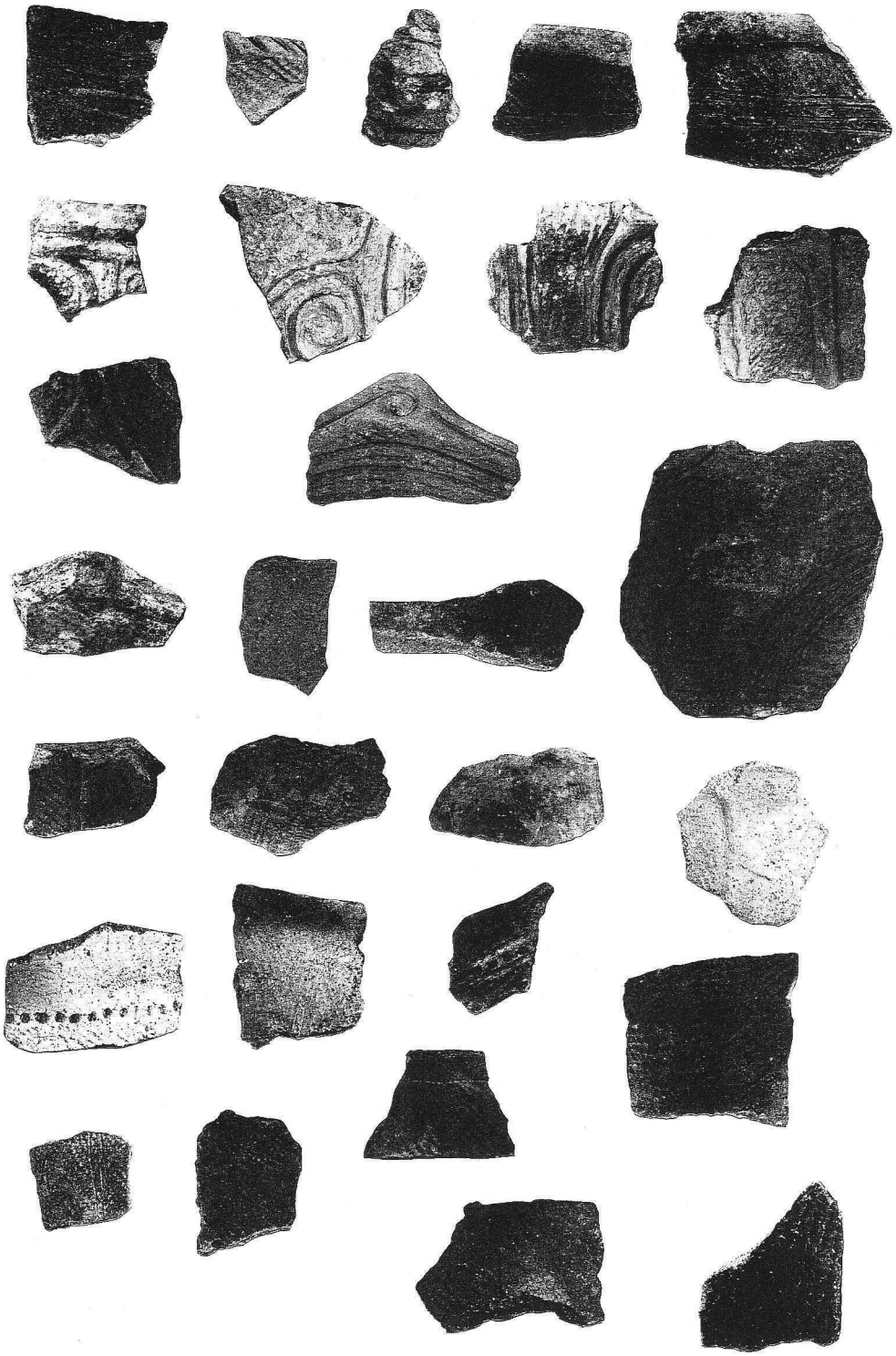
空堀、土層断面

Ⅱ帯郭溝状遺構確認状況



Ⅱ帯郭溝状遺構完堀状況

PL 2　各帯郭の状況



PL 3　出土遺物（1）

PL 4　出土遺物（2）

PL 5　出土遺物（3）

鹿角市文化財調査資料　57

黒土館跡発掘調査報告書

発行年月日　平成８年３月29日

発　行　者　鹿角市教育委員会
〒018-52　秋田県鹿角市花輪字荒田4番地1
TEL 0186-30-1111（代表）

印　刷　所　グラコン社
〒018-51　秋田県鹿角市八幡平字高見田50